連載小説
まちおこし特命社員 石打悠太

「馬鹿者」を命ず！

第十一回 まちおこしプロジェクト動き出す その一

イラスト●丹下京子

登場人物

石打悠太（いしうち・ゆうた）
25歳、主人公、商店街の再生やまちおこしプロジェクトを手がける大学発のベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの若手社員。入社2年目で四国・伊予南市に赴任する。

新庄誠人（しんじょう・まこと）
39歳、伊予南市役所・地域振興課長。

喜多嶋翔（きたじま・しょう）
25歳、西朱雀プロジェクト社員。悠太の1年先輩。

花咲かえで（はなさき・かえで）
25歳、西朱雀プロジェクト社員、悠太の1年先輩。

広岡卓次（ひろおか・たくじ）
49歳、地域おこし協力隊員として東京から伊予南市に移住したが……。

亀田太（かめだ・ふとし）
29歳、伊予南市役所・地域振興課員。悠太に脅迫状を送り、上司の新庄が対処したのだが……。

前回までのあらすじ

二名島バッテリーの榎太一から、工場移転の撤回に見合う条件を示せといわれた大渡市長は、悠太に当たり散らす。悠太は先輩の喜多嶋に仕事を引き継ぐべく、空港へ迎えに行き、入れ替わりに伊予南を離れようとしたのだが。

「至急戻らなければならなくなっちゃって……」

悠太は言いわけめいたことをもごもご言いながらバスに乗り、席に着いた。

とたんにケータイが鳴った。花咲かえでだった。

「石打くん、あたし、あなたのことを改めて考えたのだけれど、やはりまちおこし特命社員の仕事から逃げてはだめ。大阪に来て」

「実はいま伊予南市に戻るところなんです。喜多嶋さんから至急戻ってきてくれと連絡が入って」

「何があったの？」

「わかりません。『とにかく大変なんだよ！　とっとと帰ってこい！』の一点張りなんです」

「あれほどあなたのあと釜を狙っていたのに戻ってこいだなんて、あの無駄にデカいのらしくないわ。何があったのかしら」

「至急帰ってきてくれ。大変なことが起きたんだ」

悠太が返す言葉を見つけられないでいると、

「とにかく大変なんだよ！　とっとと帰ってこい！」

喜多嶋は悲鳴のような声を出した。

終点の空港で高速バスを降りた悠太はターミナルビルには入らず、伊予南駅行き高速バスの停留所まで歩き、逆方向のバスを待った。

「あと一歩で伊予南市からさよならできるのに……」

舌打ちしたい気持ちだったが、喜多嶋が心変わりしてしまったら、いつまでたってもここから出ていかれなくなる。今は喜多嶋の言うことを聞くしかないのだ。

十五分後にやってきた高速バスの運転手はさっきのバスと同じだった。

大正大学地域構想研究所ホームページ（http://chikouken.jp/chiikijin）では、
連載小説「『馬鹿者』を命ず!」のバックナンバーを閲覧できます。

かえでの声には抑え切れない好奇心が滲んでいた。

伊予南駅でバスを降り、事務所兼社宅の冠木門をくぐった悠太は「うわ！」と叫んだ。

庭に停めた中古車のラパンと玄関の引き戸に真っ赤なペンキがぶちまけられていた。

ラパンはフロントガラスもサイドガラスも真っ赤に染まり、車体にもあちこちに赤いペンキが飛び散っている。引き戸は半分近くがペンキで汚されている。だれかがバケツにペンキを入れて浴びせかけたのだろうか。

引き戸が開き、顔面蒼白の喜多嶋が飛び出してきた。

「これ何だよ？　お前ここで人に恨みを買うようなことをしでかしたのかよ」

「喜多島さん、だれの仕業か全然見ていなかったんですか」

「シャワーを浴びていたんだよ。長旅で汗をかいて気持ちが悪かったからな。その後、三十分ほど仮眠を取って、そろそろ市役所に挨拶に行こうと外に出たらこのありさまだ。悠太、お前ここで何をした？　人でも殺したか？」

悠太は無残な姿に変わり果てたラパンと玄関の周囲を見回した。

冠木門から玄関までの敷石に赤いペンキの足跡が二つ、三つ残っていた。

悠太はその足跡と自分の足を比べてみた。足跡は小柄な悠太の足よりさらに小さい。

「犯人に心当たりがあります。今から行ってみましょう」

「警察に通報しないでいいのか」

「それは後で考えましょう」

悠太は担いでいた荷物を事務所兼社宅の中に放り込み、怖気づいて渋る喜多嶋をラパンに乗せた。

「フロントガラスがペンキで真っ赤じゃないか。これで前が見えるのかよ」

「ペンキ越しに何とか見えます」

「赤信号はどうするんだ？　識別できないぞ」

「信号が近づいたらサイドガラスを開けて、赤か緑か僕に教えてください」

悠太はエンジンをかけた。

市役所の駐車場にラパンを停めた悠太は喜多嶋を伴い、市庁舎の二階に上がって地域振興課のドアを開けた。

亀田太は廊下側の席にちょこんと座っていた。地域振興課の課員で以前、悠太に「一カ月以内に追い出してやる」と脅しの書き置きを残した小がらな男だ。

上司の新庄はいない。まだ清谷から帰ってきていないのだろう。

「新庄さんが言っていた通りですね。亀田さん、復帰されたのですね」

振り向いた亀田は悠太たちを見て息を呑んだ。

「亀田さん、僕たちがなぜここに来たのか

わかりますか」
　亀田は怪訝な顔をした。
「赤いペンキに覚えはありますか」
「何の話ですか」
　悠太は中に入り、亀田に近づいてその足を持ち上げた。
「何をするんですか！」
　悠太は亀田の革靴を無理矢理脱がせた。靴底を確かめたがペンキは付着していない。
「石打さん、あなた何のつもりですか。これって暴力ですよ！　これ以上わけのわからないことをしたら大問題にしますよ！」
「すみません。実は……」
　亀田は悠太から靴を引ったくった。
「僕も暇ではないんです。今の無礼は無かったことにしてあげますから、とっとと帰ってください。さあ！」
　亀田は廊下を指さした。その人差し指に赤いペンキがこびりついていた。
「あ……」
　亀田の表情が凍り付いた。
「あんた、どういうつもりなの？」
　喜多嶋は一歩前に出て、口を挟んだ。亀田が悠太より小柄で気が弱そうなのに勇気を得たらしい。
「家や車にペンキをかけるなんて器物破損だよ。警察に通報したら懲戒解雇だけでは済まないかもしれない」
　亀田の顔が歪む。
「亀田さん、僕たちに嫌がらせをするのはもう止めたのではなかったのですか」
「何とか言ったらどうなんだ」
　喜多嶋が大きな手で亀田の机を叩いた。喜多嶋自身も驚くような音がして、他の部署の職員たちが何ごとかとこちらを見る。
「何を言っているのかまだよくわかりませんね。この汚れはペンキではありません。マジックインキです」
「それならこれは？」
　悠太は亀田の左手をつかんだ。左手にも赤いペンキの汚れが残っている。
　亀田は諦めたように息を吐き出し「堪忍してください」と憐みを乞うような声を出した。小さな体がさらに縮んでしまったように悠太には見えた。
「なぜこんなことをしたのですか」
「広岡さんが街を出ていくと言い出したんです。今朝、電話してきて『地域おこし協力隊員を辞めて他所に引っ越す』って。広岡さんに移転先や仕事のあてがあるはずはありません。あの人、捨て鉢になっているんです」
　悠太は、血まみれになって部屋に横たわっていた広岡卓次の姿を思い出した。
「それがあんたのとんでもない嫌がらせとどんな関係があるんだよ」
　喜多嶋が威圧的な物言いで割って入った。喜多島は形勢が有利になるとたんに勢いづくタイプだ。
「広岡さんが出ていくのはあなたたちのせいだからです。とくにあなた、デカい人が来たため、自分はこの街にはもう不要だとすっかり思い込んでしまったんです」
「広岡さんは喜多島が僕の代わりに来るのをもう知っているんですか」
「新庄課長が話したはずです。課長は今朝、『エースが東京から送り込まれてくる』と私に連絡してきました。その時、『関係多方面にも知らせなければ』と言っていました」
「それで俺に嫌がらせをして、出ていかせようとしたのか」
　喜多嶋はまんざらでもない顔をした。
「石打さん、僕を警察に突き出しますか」
　悠太と喜多嶋は顔を見合わせた。
「器物破損ですから、当然ですよね」
「少し考えさせてください。喜多嶋さん、警察に通報するかどうかはさておいて、僕に付き合ってもらってもいいですか」
　喜多嶋がきょとんとした。
「広岡さんが心配なんです」
　地域おこし協力隊員として伊予南市に移住する直前に買ったノートパソコンをキャリーバッグに入れて、荷造りはすべて終わった。
　広岡はがらんとした部屋を見回した。不要な着替えや書類、妻が置いていった食器、雑貨などはすべて処分したので、部屋にはもう何も残っていない。
　広岡は畳に腰を下ろし、やれやれとため息をついた。ここで二年近く暮らしたというのに荷造りはあっけないほど簡単だった。まるでここでの二年間が無意味な時間だったと改めて広岡に教えてくれているかのようだ。
　車が近づいてきて、庭に停まる音が聞こえた。
　広岡は立ち上がり、身構えた。
　玄関の戸がノックされ、予想した通り「広岡さん、いらっしゃいますか」と新庄の声がした。
「何しに来た？」
　戸を開けた広岡は新庄を家の中には入れず、広岡自身が庭に出た。たとえ早々に引き払う予定の家でもこの男を中に招き入れる気持ちにはなれなかった。
「広岡さん、あなたこそどういうつもりですか」
「亀田に聞いたのか」
「今朝、電話で報告を受けました。彼、ここを出ていくとあなたから聞かされて錯乱していました。私としてはまた何かとんでもないことをしでかすのではないかと心配ですね」
「それなら亀田のそばにいてやった方がいいんじゃないのか」
「あなたの方が先ですよ。亀田から聞き、清谷から飛んで帰ってきたんです」
「それはご苦労なことだな。しかしおかげで市役所まで報告に行く手間が省けた。改めて言うよ。『不肖、広岡卓次、地域おこし協力隊員を辞めさせていただきます』」
「広岡さん、なぜですか。何かありましたか」
「俺に残り時間がないと言ったのはあんただろう。だったら期限が来る前に出ていってやろうと思っただけだ」
「そうは思えませんね。広岡さん、あなたにはまちおこしの隠し玉があるはずです。もしかして、別れた奥さんとのことで何かありましたか」
　広岡の鼻の奥がきな臭くなった。この男はいつも人の心に土足で踏み込んでくる。昨日、ここにやってきたときもそうだった。
「勝手な詮索をするな！　帰れ！」
　広岡は新庄に近づき、両手で胸を押した。
「ちょっと、やめてもらえませんか、広岡さん！」
　広岡はさらに胸を押し、なおも新庄につかみかかった。
「どうしてそこまで広岡という男にかかわるんだよ。今のお前の話だと奥さんに逃げられるわ、手首を切るわ、危ない奴じゃないか。むしろ出ていってくれた方がこの街は平和になるんじゃないのか」
「喜多嶋さんがそう思うのは無理もありませんが、僕には放っておけないんです」
　悠太は国道を山すそへと走り、樹々が生い茂る林道に入った。
　赤いペンキ越しに見える風景はすべて赤く染まっているが、それにも徐々に慣れてきていた。
　坂道を上り、樹々が途切れたその先に以前、訪ねたトタン屋根の家が見えてきた。広岡の家だ。
　悠太はさらにスピードを上げた。その視界に、庭で揉み合う二人の男の姿が飛び込んできた。
　悠太は敷地前にラパンを停めた。
　揉み合っているのは広岡と新庄だった。広岡がつかみかかり、新庄がそれを振り払おうとしているらしい。
「広岡さん！　新庄さん！　何をしているんですか！」
　広岡が悠太たちに気を取られたその隙をついて、新庄が腕を振り払う。

広岡がバランスを崩して片足立ちになり、そのまま二歩、三歩と後ずさって背中から玄関の戸に倒れ込んだ。

戸が外れて倒れる音とガラスが割れる音、広岡の叫び声が同時に聞こえた。

「広岡さん！」

悠太と喜多嶋と新庄が同時に駆け寄った。

広岡が玄関の戸の上に倒れ、痛みに顔をしかめている。

ガラスで切ったのだろう、首筋や肩や腕からおびただしい血が流れていた。

「ああ……」という声が聞こえたかと思うと地響きがした。

喜多嶋が卒倒したのだった。

午後四時過ぎ、手術中の赤いランプが消えた。

手術室のドアが開き、執刀医がまず出てきた。悠太は弾かれたように立ち上がった。

「広岡さんの容体は？」

「幸い深い傷はひとつもなかったので命に別状はありません。三、四日で退院できるでしょう」

悠太は安堵のため息をついた。

ストレッチャーに乗せられた広岡が出てきた。まだ麻酔が利いているらしく静かな寝息を立てている。

「広岡さんの病室は気絶した背の高い人と一緒ですよ」

看護師が悠太に声をかけた。

喜多嶋には怪我はなかったが、しばらく安静にしていた方がいいとの医者の判断でベッドに寝かされているのだ。

悠太は、ストレッチャーを押す看護師たちの後について病室に向かった。

病室では喜多嶋が目を覚まし、ベッドの上であぐらをかき、ぼんやり宙を見つめていた。何だか魂を抜かれたように生気がない。

「石打悠太さんですね」

病室に入ろうとした悠太に背後から声がかかった。

制服を着た若い警官と刑事らしい四十代の背広姿の男がこちらに近づいてくる。

「広岡さんが怪我をされた件で、あなたからも事情を聞かせてもらいたいんです。署までご足労いただいてもよろしいですか」

悠太はうなずいた。

広岡が救急隊員たちによってこの病院に搬送された後、新庄は自ら所轄の警察署に出頭していた。悠太への事情聴取は新庄の供述の裏を取るためでもあるのだろう。

「それからもう一つ、赤いペンキで汚れた軽自動車が駐車場に停まっていますが、もしかして、あなたの車ですか」

「はい」

「そちらについても事情を聞かせてもらえますか。実は一時間ほど前、伊予南駅にほど近い古民家が赤いペンキで汚されていると通報がありましてね。念のために駆けつけてみると古民家はもぬけの殻で、赤いペンキのついた車のわだちが庭に残っていました。知っていることを洗いざらい教えてほしいですね」

刑事は鋭いまなざしを悠太に向けた。

事情聴取から解放され、警察署を出た時、時刻は午後七時を回っていた。

悠太は駅近くのコンビニエンスストアで弁当とビールを買い、事務所兼社宅を目指した。これから空港までバスに乗り、羽田空港行きの航空チケットを買って飛行機に搭乗する気力はすっかり失せていた。今日は事務所兼社宅に泊まり、明日の朝一番で伊予南市を出ていこう。

事務所兼社宅は屋内に明かりが灯っていた。喜多嶋が病院から帰ってきたのだろう。

悠太はペンキで汚れた引き戸を開けた。その耳に喜多嶋の話し声が聞こえてきた。だれかいるのだろうか。

「お帰り！」

弾んだ声を発し、スキップするように姿を表したのは花咲かえでだった。

「伊予南市でいったい何が起きたのか知りたくて、我慢できなくなってしまったの。それで大阪駅から高速バスに飛び乗ったのよ。大変だったのね」

かえでは好奇心で鼻の穴を膨らませた。

「石打くん、警察では何を聞かれたの？」

「広岡さんが怪我をした時の様子です。見た通りを話しました」

「赤いペンキのことも聞かれたんだろう？」

喜多嶋の声がした。

悠太は居間兼食堂に入った。喜多島がビールを飲みながら豚まんを食べていた。豚まんはかえでの大阪土産だろう。

「そちらも包み隠さず話しました。今ごろ亀田さんも事情を聞かれているはずです」

刑事たちは当初、悠太が赤いペンキをかけたのではないかと疑っていたのだった。その疑いを晴らすためには亀田の話をするしかなかった。

「無駄にデカいのにまた聞きしたのだけれど、その亀田という人、自分のせいで広岡さんが奥さんに逃げられてしまったと思い込んでいるのよね？　それで広岡さんの味方をしてあげることで、少しでも罪滅ぼしをしようと石打くんたちに嫌がらせをしたのよね？」

かえでは好奇心を全開にさせて、矢継ぎ早に悠太に質問した。ふだんはおとなしいが、興味を引かれると人を質問攻めにするのだ。

悠太は弁当を食べながら、今日起きた事件とその原因となった過去のいきさつについて一通り説明した。

かえでは抑え切れない好奇心で鼻をひくひくさせながら話を聞き、悠太の説明が終わってからも、話の内容を反すうするかのように何度もうなずいた。

「さて、今度はあたしの話ね」

ひとしきり事件の話で盛り上がった後、かえでは真顔になった。

「電話でも話したように、あたし、まちおこしのアイデアを一つ思いついたのよ。それほどお金をかけず、でも確実に地域の魅力を都会に住む人たちにも伝える方法を考えたの。それをこれから話すから、もし面白いと思ったら、石打くん、あなたが市長に提案してみない？」

「僕が…ですか？」

「そう、それはあなたの役割よ」

「でも……」

悠太は喜多嶋を見た。

「いいんじゃないか」

喜多嶋がもっともらしい顔をした。

「過去のいきさつを知らないとこれからも何かと不都合が生じてしまいそうだ。お前、しばらくここにいて、俺を補佐してくれよ」

喜多嶋は懇願するような顔をした。

Kazuhiro Shibuya

作家・経済ジャーナリスト・
大正大学表現学部客員教授。
1959年12月、横浜生まれ。
日経BP社で「日経ビジネス」副編集長、「日経ビジネスアソシエ」創刊編集長、
「日経ビジネス」発行人などを務めた後、
2014年3月末、独立。1997年に長編ミステリー
『錆色（さびいろ）の警鐘』（中央公論新社）で作家デビュー。
TV、ラジオでコメンテーター、MCも務める。